

---

## 初期デリダにおける暴力の主題

### ——植民地主義とアルジェリア戦争を背景として——

小川歩人

---

われわれは絶対的に平和な、とは言わない。超越論的で前 - 倫理的な暴力、非対称性（一般）が存在しているのであり、[……] しかるのちに、逆の非対称性、倫理的な非暴力が可能になるのである

Jacques Derrida, « Violence et métaphysique »

占領者と被占領民の出会いはずべて虚妄なのだ

Frantz Fanon, *Sociologie d'une révolution (L'an V de la révolution algérienne)*

ごく間近にして限りなく遠いということ——それこそが、こう言ってよければ、われわれがその経験をたたき込まれた隔たりであった。それは忘れがたく、一般化可能なものである

Jacques Derrida, *Le monolinguisme de l'autre*

### はじめに

本稿ではジャック・デリダ（1930-2004）における植民地主義の問題について、とりわけその出自であるアルジェリアをめぐる同時代的な政治性とともに論じることを試みる。

はじめに、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクによる指摘、つまり、デリダの思想的核を端的に「移民」としての経験によるものであるという指摘を引いておきたい<sup>1</sup>。こうした指摘

---

<sup>1</sup> 「デリダ自身の、フランス系マグレブ人——アルジェリア・ユダヤの血を引いているので、彼は自分をこのように形容する——としての立場は、グローバルな闘争へと、一般的な流儀においてではなく、むしろ脱構築的なやり方で向かう。すなわち『マルクスの亡霊たち』で提起されているように、経済的に意識された人間の権利についてのヴィジョンを呼び求めるというやり方である。デリダのより練り上げられた主張点は移民経験から引き出されている。新しいヨーロッパの二重の責任（『他の岬』、一九九一年）、「オントポロジー」——一種の（多）文化主義的同一性主義のようなものであって、「現在していること [オン (on)]」の存在論的価値をその置かれている状況に、場所性、つまりは領土、生地、都市、身体一般といったトポスのもつ安定した現前可能な規定態に、解きがたく結びつけようとする公理主義（*Specters*, p. 82）のことをいう——の批判、そして絶対的な到来者（*arrivant*）の諸形象（なんらかの計算可能なディアスポラとして生きられる脱構築不可能な他性の形象）等々。デリダがアルジェリアにおける彼の若き日々と言及するとき（「割礼告白」『ジャック・デリダ』所収、一九九一年）、彼は民族解放を最近経験した国のことを語っているのではない。したがって、彼はいかなる

はともすれば非常に「素朴」であり、デリダの思想をその伝記心理的要素を還元しかねないものなのかもしれない。

しばしばデリダの思想を区分けする際に「倫理・政治的転回」なるものが喧伝される。1980年代末を境に増加する政治的主題をあつかった著作がそのような転回の存在を解釈者に想像させてきたのである。ただし、そうした想像は虚妄だということは明らかである。というのも、デリダ自身がそのような「転回」について「一九八〇年代ないし九〇年代に「脱構築」の、少なくとも私がその経験をしているような「脱構築」の、政治的転回ないし倫理的転回なるものはけっしてなかった」と明確に否定しているからである<sup>2</sup>。

しかし、デリダの膨大な著作を探訪するにあたって一応の見通しをつけるために、しばしば、ひとはデリダのテキストに時期区分を設ける。そうすると、ひとは理論的著作を著した初期、前期、実践的著作群を書いた中期、政治的・倫理的主題をあつかう後期、晩期といった区分を手にするようになるだろう。

たとえば宮崎は政治的・倫理的な主題変更をしていく後期という区分を一応はマークしつつ、「主題上の外面的傾向が示している相対的な特徴として取り出しうる指標」としてのみ、これを取りあげる（宮崎裕助（2020）『ジャック・デリダ 死後の生を与える』岩波書店、33頁）。その上で、「思想の内在的ないし本質的な点で「転回」や「断絶」が生じたという見方」をデリダとともに否定する（同上）。政治的主題は明確に増えているが、理論的には一貫している。このような見方はデリダ研究に精通していればいるほど、慎重で正当な身振りである。それゆえに、たとえば松田は「戦争」を初期デリダの主要な語としつつも、「国家、民族、企業、市民を問わず、複数の集団間で生じる武力衝突や政治的な緊張関係」としての「戦争」は、デリダにおいて問題とはならないとし、「生成の原理」としての「ポレモス」こそがデリダの主題だと「正当に」解釈をおこなう（松田智裕（2020）『弁証法、戦争、解説：前期デリダ思想の展開史』法政大学出版局、10頁）。確かにデリダの暴力についての思考は「現実の戦争」に尽きるものではない。「より深い」水準の暴力に対する鋭敏な分析がデリダの真骨頂だと言っておく必要はあるのだろう。しかし、そうした迂回は、デリダの政治的態度、その理論的実践をテキストの表面ないし奥行きから消し去ることになるのではないだろうか。しかし、理論と実践の相即なし、というのは本当か。そこにはむしろある種の抑圧と緊張関係があったのではないのか。

実際、デリダの証言やブノワ・ペータースによる伝記を紐解けばみてもとれるが、「理論的」と称されてきた初期デリダの政治的実践に対する距離は自身の出自であるアルジェリアとの微妙な関

---

正確な意味においても「ポストコロニアル」ではないのである」。Gayatri Chakravorty Spivak (1999) *A Critique of Postcolonial Reason Toward A History of The Vanishing Present*, Harvard University Press, p. 431.

（「脱構築への仕事のとりかかり方」『ポストコロニアル理性批判』上村忠男・本橋哲也・高橋明史・浜邦彦訳、月曜社、2003年、609頁）

<sup>2</sup> Jacques Derrida (2003) *Voyous Deux essais sur la raison*, Galilée. (『ならず者たち』鶴飼哲・高橋哲哉訳、みすず書房、2009年、85頁)

係を反映していた<sup>3</sup>。確かにデリダは「戦争／平和」の表面的な二項対立を語ることを避けていた。しかし、「暴力と形而上学」において、たとえば全体性の暴力たる戦争に対し、言葉によって切り開かれる他者との平和の次元を主張したレヴィナスへ、デリダはむしろ「最小限の暴力」と「戦争」という主題を衝突させていた。彼の脳裏に当時の中東戦争、アルジェリア戦争という背景があったことは想像するにたかくない。このような言い方は、現実的な戦争の水準から距離をとり、存在論的な水準における抗争をハイデガー読解において示そうとしたデリダの意図を裏切るものであることは承知しているが、少なくともそう言うべきだと考える。時局的な発言をおこなう媒体をもたなかったデリダにとって、哲学的な水準で解釈を提示することは政治的応答として二重性を帯びていたのではないだろうか。このような二重性を語ることでこそ、冒頭のスピヴァックに対する応答は可能になるのではないか。本稿ではあえてデリダの思想をその伝記的背景に紐付けながら解釈をおこなうことで、初期デリダの理論枠組みの射程を、そのコンテクストに局限し、そこから政治的・倫理的なポジショナリティを析出させることを試みよう。

本稿の流れをみておく。まず先行研究に即して、デリダの政治的立場をフランスのリベラリストの立場との近縁性から捉える。本稿では、エドワード・ベアリングの論文「自由主義とアルジェリア戦争：ジャック・デリダのケース」（2010）が参考になる。同論文では1952年の学生時代のレポート、1962年のピエール・ノラへの手紙、1963年の「コギトと『狂気の歴史』」初出といった初期テキストの検討がなされているが、ここに見出されるのはあくまでアルジェリアの「フランス人」として、フランスに帰属しながらアルジェリアにおける植民地支配の是正、多民族共生の可能性を探るデリダの位置である。次いで、こうしたデリダの位置どりがカミュなどの先行世代の「アルジェリアのフランス人」を追うものであることを確認しつつ、同時にカミュに対するエドワード・サイードの批判をみたい。サイードは、植民地主義イデオロギーを内面化したカミュのエクリチュールを、アルジェリアの独立をめぐる政治時評とともに批判している。こうしたサイードの批判は一面で、初期デリダの政治的立ち位置およびその理論構成への批判でもありうる。そして、「アルジェリアのフランス人」イデオロギーの植民地主義親和的性格を確認した上で、初期デリダの核となる立論のひとつ、超越論的ヨーロッパとして形象化される西欧理性に対する外部性の共属というアイデアをとりあげる。デリダのフッサール、レヴィナス、アルトー、レヴィ=ストロース批判が範例的である。デリダは西欧理性の自民族中心主義を批判しつつ、そこから切断された外部を肯定的にくりだそうとする諸論理の限界を指摘する。西洋批判と、西洋の外部の独立の困難を同時に指摘する論理は、デリダのアルジェリアをめぐる立場、つまりフランスからの政治経済的独立とは別の仕方での国際関係の構築を志向する立論と類比的に理解可能で

<sup>3</sup> 松葉は松田前掲書に対してデリダが同時代的に第二次世界大戦後のフランスの戦争状況やアルジェリアでの兵役や引き上げが思想の転回点となりえた可能性を指摘している。松葉祥一（2021）「戦争の弁証法？ ——『弁証法、戦争、解説』を読む」『立命館大学人文科学研究紀要』、128号、立命館大学人文科学研究所、41-52頁。ただし、松葉も1950年代のデリダが、「政治的な活動から距離をとっていたこと、政治的なテキストがないことははっきりしている」とし、「デリダが初期から政治的だったと主張するつもりはない」と述べている。

ある。そうした西洋への参照の不可避性をデリダはおそらく「暴力」と呼ぶだろう。本稿では、これを西洋的なものへの原事実的所属による暴力性の胚胎として理解してみたい。

### 「アルジェリアのフランス人」「リベラル」の「なまぬるさ」？

デリダの記述の位置付けにくさは、彼の政治的記述の少なさと、その中間的な記述にある。たとえばデリダのハイデガー解釈では、しばしば保守的か、革命的かという二者択一に乗らない態度がみられる。同時代的にみればナチスドイツとの関係からハイデガーの「保守性」については批判もあったが、デリダの記述にはそうした批判を潜り抜けるハイデガーの読解軸を探ろうという意図が見出せる<sup>4</sup>。こうした右派左派問わない仕方で、抵抗や自己固有化の契機が見出されうるという論点自体は後年のインタビューでもしばしば現れる<sup>5</sup>。

さて、こうした右派左派の二分法にのらない揺れ動きはある面で「なまぬるい」<sup>6</sup>ものかもしれないが、これを考える際に重要なのはアルジェリアでの経験である。デリダの「アイデンティティ」は極めて複雑であるが、本稿ではそれをまず「アルジェリアのフランス人」という表現においてみてとることにしたい。まずこの表現を引き受けること、つまり、デリダという人物をひとまず「アルジェリア人」ではなく「フランス人」と名指すことから、スピヴァクによる「ポストコロニアル」でない」という指摘が再検討できるように思われる<sup>7</sup>。

デリダはフランス領百年を記念する 1930 年のアルジェリアに、父ハイム・アーロン・プロスペール・シャルルと母ジョルジェット・スルタナ・エステル・サファーのあいだに三男として生まれた。デリダ家は 1830 年のフランスによる占領以前にスペインからたどり着いたユダヤ系移民であった。本稿では、さしあたり占領以前の非フランス的ルーツを有しながら、占領以後、

<sup>4</sup> 「Entschlossenheit の本来的な自己-伝承なしには、歴史に対するあらゆる関わりは、非本来的なものとなるでしょう。そもそもそれが保守的な伝統主義の形をとるか、革命的な取り壊しの形をとるかにかわりません」。Jacques Derrida (2013) *Heidegger – la question de l'Être et l'histoire. Cours à l'ENS-Ulm 1964-1965*, édition établie par Thomas Dutoit avec la collaboration de Marguerite Derrida, Galilée, p. 281 (『ジャック・デリダ講義録 ハイデガー——存在の問いと歴史』亀井大輔・加藤恵介・長坂真澄訳、白水社、2020 年、265 頁)

<sup>5</sup> 「抵抗はいつも可能です。抵抗は時には、開放的な精神のなかにつくられ、時には反動主義者や旧套墨守、凝り固まったナショナリズム支持者たちによって引き受けられ、事態はイデオロギー的に複雑なものです」(ジャック・デリダ、アイサ・ケラティ (1999) 「最悪の抑圧の一つ、言語の禁止について」吉田晴海訳、『現代思想』第 27 巻第 3 号、青土社、104-115 頁)。

<sup>6</sup> 1962 年のアルジェリア独立直前、フランスの極右民族主義組織 OAS (Organisation de l'armée secrète、秘密軍事組織) とアルジェリアの FLN (民族独立戦線) の双方から、アルジェリアを離れようとするデリダの兄、ルネの家族は問い正しを受け、どちらの側にもつくことが曖昧なものとして「なまぬるい奴 tièdes」とみなされたという。Cf. Benoît Peeters (2010) *Derrida*, Flammarion, p. 156.

<sup>7</sup> アルジェリアにおいて「フランス人である」という点については後年のインタビューでも重要な視点だということが指摘できる。「パラドックスは、自分自身フランス人であり、アラブ人あるいはカピリー人であったアルジェリア人の排除のことも気掛かりであった私が、アルジェリアのフランス人側にいたということで、そしてこのことこそが今日の私の表明の仕方なのだとすることを改めて言っておきます」(ジャック・デリダ、アイサ・ケラティ (1999)、111 頁)。

「フランス人」として組み込まれていったアルジェリアの中流ユダヤ人家庭の風景を確認して、デリダのテキストの検討に移りたい。まず重要なのは「コギトと『狂気の歴史』」の雑誌掲載時の記述である。

「反植民主義革命は、超越論的ヨーロッパ、すなわち〈理性〉の名においてのみ、経験的ヨーロッパないし西洋から自らを解放し、その価値、その言語、その科学、その技術、その武器によって勝利するのである。いかなる叫び[cri]も、それがどれほど純粋で、妥協しない[intransigent]ものであろうと——わたしはファノンのそれを考えているのだが——還元不可能な汚染ないし非一貫性を排除できないのである」(Jacques Derrida (1964) « Cogito et histoire de la folie », in *Revue de Métaphysique et de Morale*, 4, PUF, <http://www.jstor.org/stable/40900776>, p. 466. )

「コギトと『狂気の歴史』」は1963年4月にコレージュ・フィロゾフィックでおこなわれた講演であり、同年 *Revue de Métaphysique et de Morale* に掲載された後、加筆修正を経て1967年に『エクリチュールと差異』へ収録された。大枠としてはフーコーの『狂気の歴史』の長大な書評であるが、理性が排除するとされる大文字の狂気が実のところ極限においていかに理性と絡み合うのかについて、デカルト『省察』解釈を範例としつつ論じられるテキストである。上記の引用箇所はヘーゲルを参照しながら理性に対する革命がいかにして理性と絡み合うかを論じる文脈であるが、ここでデリダは類比的にフランツ・ファノンの名前を出し、反植民地的暴力が超越論的ヨーロッパの理性から自由でないことを想起させている<sup>8</sup>。

ファノン『アルジェリア革命第五年』(1959)において、1954年からのアルジェリア独立戦争について記述しているが、最終部において、フランスの植民主義に対してアルジェリア人民が打ち立てる民族解放の革命こそが、「人間を変え、社会を一新」する真の革命であり、新たな人類を創造し準備するものだとして主張する。そのまさに結論部において「理性 *raison*」という語を召

<sup>8</sup> 具体的にどのようなファノンのテキストを想定しているかは不明だが、たとえば『アルジェリア革命第五年』(1959)の結論部における次のようなセンテンスをデリダは想定しているように思われる。「植民地化の歴史に対して、今日アルジェリア人民は民族解放の歴史を対置する。まだ知るべきことがある。果たしてフランス政府が今日なお可能なことを考慮しているかどうかということだ。本書において [……] 植民地現地人が自己開放の道をいかに辿ってきたかをあとづけてみた。厳格に人間的な面で、つまりその驚くべき精神の昂揚の面で、もはや逆戻りはできぬ根本的な一革命が、絶えざる探究のなかで、確かに作りだされたのである。いまや、ことばは理性に立ち戻るべきであろう。たとえフランス政府が事態を1954年前かあるいは1958年にまで戻したくとも、以後それが不可能だと知るのが賢明である。逆にもしフランス政府が、ここ五年来アルジェリアの意識の中に起こった変化を考慮し、世界の隅々からこの革命をはげまし、自由の勝利のために流血も苦痛も顧みなかった一民族の闘争のなかに、己の姿をみとめているあの友情溢るる不屈の人々の声に耳を貸す気があるならば、その時は、まだなお全てが可能だと申し上げよう。」(Frantz Fanon [1959] (1972) *Sociologie d'une révolution (L'an V de la révolution algérienne)*, Maspero, p. 151 (『革命の社会学 アルジェリア革命第五年』宮ヶ谷徳三・花輪莞爾訳、みすず書房、1969年、151頁、下線部強調引用者)。

喚する。事実的な西洋に対する反対運動のただなかで、西洋において発生した「理性」という理念的価値が再び参照されることで、アルジェリア革命が捉え直されるのである。ここで事実上の植民地主義的国家から区別される仕方で、不可避的に参照される権利上の「西洋」という起源的価値が「超越論的ヨーロッパ」と呼ばれるのである。

「コギトと『狂気の歴史』」初出が興味深いのは、ファノンへの参照を通して、初期デリダの「超越論的ヨーロッパ」の不可避性という論点がアルジェリアの文脈に紐づけられるからである。この超越論的ヨーロッパ、西洋の理性との関係の不可避性という論点は、「幾何学の起源」「序説」のフッサール解釈以後、「コギトと『狂気の歴史』」だけでなく、「暴力と形而上学」におけるギリシヤ的思考とユダヤ的外部、アントナン・アルトー、レヴィ=ストロース論における西洋と脱植民地主義という論点としても反復されている。『エクリチュールと差異』改稿時には消去されているものの、「コギトと『狂気の歴史』」におけるファノンへの言及は同時代のデリダのテキストのなかではほぼ唯一アルジェリアを参照する箇所であり、デリダの哲学理論的なテキストの背景に同時代的な政治的関心がうかがえる重要なポイントである。ベアリングが指摘するように、この初出時のテキストのなかでは「革命的」や「騒乱」といったモチーフがアルジェリア問題によってフレーミングされており、また同時にアルジェリアのフランス人リベラルの信条の再確認がおこなわれているのである<sup>10</sup>。

---

<sup>9</sup> 「(理性) (一般) が打ち勝つことのないようなトロイの木馬は存在しない。理性の秩序の乗り越え不能で、代替不能で、堂々たる大きさ、この理性を事実的な一つの秩序ないし構造、ある特定の歴史的構造、ありうべき数々の構造のうちの一つの構造ではないものになっているもの、それは、この理性に訴えることでしかそれに抗議できず、この理性はそれ自身の領野には我々に策略や戦略の依拠しか残さないとすることだ。これは〈理性〉一般の法廷に理性のひとつの歴史的規定を出廷させることに等しい。理性に反対する革命、理性と言ってもそれはもちろん古典的理性の歴史的形式としてあるのだが(この古典的理性は〈理性〉一般のある特定の例でしかない。〈理性〉のこうした単一性のせいで、「理性の歴史」という表現は思考困難なのだが、結局は「狂気の歴史」という表現も同様である)、このような理性に反対する革命は当の理性のなかで、あるヘーゲルの次元に即してのみなされるのであって、フーコーの書物のなかにはヘーゲルへのあからさまな言及は不在であるとはいえ、私はこの次元をはっきりと感知した。口に出されるや否や理性の内部でしか遂行されないもので、そのため、理性に反対する革命は、まさに内部を司る内務省の言語で騒乱とよばれているものがそうであるように、つねに限られた範囲にとどまる」(Jacques Derrida (1967) *L'écriture et la différence*, Seuil, p. 59 (『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年、72頁)。

2023年12月29日に南アフリカは国際司法裁判所においてイスラエルをパレスチナ自治区ガザ地区における「ジェノサイド」の疑いで提訴した。このとき、南アフリカは特定の国家、文明、文化が独占可能な普遍的なものはないのだとしつつ、「普遍化可能なもの」の価値を問うている(Edwy Plenel, «L'Afrique du Sud au secours de la Palestine : le renversement du monde», 12 janvier 2024, *Mediapart* [https://www.mediapart.fr/journal/international/120124/l-afrique-du-sud-au-secours-de-la-palestine-le-renversement-du-monde#at\\_medium=custom7&at\\_campagn=1047](https://www.mediapart.fr/journal/international/120124/l-afrique-du-sud-au-secours-de-la-palestine-le-renversement-du-monde#at_medium=custom7&at_campagn=1047))。デリダは大文字の理性の名を絶えず超越論的ヨーロッパとの関係において問わざるをえなかったが、今日、ヨーロッパを越え出る「普遍化可能なもの」をヨーロッパの名から切り離すことが問われているとすれば、いかにしてデリダの議論を引き受けるべきだろうか。

<sup>10</sup> Edward Baring (2010) "Liberalism and the Algerian War: The Case of Jacques Derrida", *Critical Inquiry*, 36,

こうした論点は、前後のデリダの資料からも補強されうる。デリダは1962年に出版されピエール・ノラの『アルジェリアのフランス人』出版に際して書簡を送っている。デリダはノラの「アルジェリアのフランス人」リベラルに対する厳しい批判に対して、むしろフランスと脱植民地運動とのあいだで動くリベラルのあり方について長文の手紙を送り、反論をおこなっている。ベアリングによれば、ノラへの手紙から読み取れるのは、植民地主義、アルジェリア民族独立戦線、フランスか、アルジェリアかといった二項対立を避けながら、ありうべき公正的態度を探ろうとするデリダの努力である。

時代背景を確認しておこう。デリダは1949年にはじめてフランスに足を踏み入れ、ルイ＝ル＝グラン校文科受験準備学級へ入学し、1952年に高等師範学校へ入る。アルジェリア戦争がはじまるのは1954年11月1日である。1962年3月18日にエビアン協定が結ばれることで独立戦争は終結となるが、デリダは1957年から1959年にかけてはアルジェリアでの兵役も経験している。デリダは1952年の高等師範学校入学から非共産党系左派グループ「自由の擁護のための知識人行動委員会」に加わり、植民地の抑圧、拷問、チュニジアやマダガスカルなどでのフランスの行動への反対運動に関与していた。

当時デリダはカミュの立場に近い仕方脱植民地主義的立場をもっており、また同時にFLN（民族独立戦線）のテロ攻撃を恐れてもいた<sup>11</sup>。1962年のノラへの手紙のなかに読むことができるデリダの「リベラル」としての立ち位置は、カミュのアルジェリアにかんする連載がおこなわれた『エクスプレス』誌を購読していた時期のものである<sup>12</sup>。政治的態度を書き込む書簡のなかで注目されるのは、デリダがカミュへの共感を前面に押し出している点である。カミュはアルジェリア独立の機運が高まるなかで、植民地主義内部での差別やヒエラルキーを問題としながら、同時に必ずしもアラブ、ムスリムコミュニティが中心となる民族独立の方向を最重視しなかった。

---

The University of Chicago, p. 257.

<sup>11</sup> Cf. Peeters (2010), p. 99.

<sup>12</sup> 「一三〇年来つづいてきたフランスのアルジェリア政策を、アルジェリアのフランス人のような特定の何かに背負い込ませることはできないのではないのでしょうか（もちろん彼らが大勢でずっと罪を犯してきたことは看過できませんし、その有罪性を等しく負わせるとしても罪が薄められるわけでもありませんが）。もしも君の言うとおりに、アルジェリアのフランス人がたしかにその歴史とその不幸の「作製職人」であったとしても、同時に、歴代政府と軍隊（フランス民衆全体の名においてある政府、軍隊）がいつもすでに「主人たち」であったことを正確にしなければ、その真実さは失われます」。Jacques Derrida (2012) « Lettre de Jacques Derrida » dans Pierre Nora, *Les Français d'Algérie*, Christian Bourgois, pp. 274-275.

「戦前に政治労働組合活動を活気づけたのは共産主義者であるかどうかに関係なく、これらの[ノラがリベラルと蔑称する]ひとびとであるし、その中心にはアレグ、オーダン、そしてカミュのような人物がいて、考え、行動したのです。四五年の終戦以降、アルジェに進歩主義-共産主義の（ええ、そうですとも）自治体を選挙で実現したのもあなたのいうリベラルたちです。さらに、アルジェリア人議員たちと共闘し、立派な仕事をしました。公然たる独立民族主義者、ナショナリストの党たちとです。五七年[のアルジェリア戦争]まで、独立民族主義者たちと接触を保っていたのは、これらリベラルの人々です。五七年とは、戦争、鎮圧、テロが多くのことを不可能にし始めた時期のことです」（*ibid.*, p. 285）



彼はむしろ「住民のあらゆる部分に対して公平」であろうとする態度をとり、「純粋にアラブだけのアルジェリア」の限界を指摘し、フランス植民によって可能になった経済開発についても一定程度評価していた<sup>13</sup>。デリダはアルジェリアの独立運動を「新しいアラブ帝国主義のあらわれ」とみなさねばならないとしたカミュの主張を退けつつも、「アラブの要求に対してどれほど好意的であるにせよ、アルジェリアに関する限り、民族独立はまったく感情的な常套句に過ぎないということをしかしながら認めるべきである」というカミュの文言を引用し<sup>14</sup>、革命的なアルジェリアのナショナリズムが、感情的エネルギーを動員する妥協なきナショナリズムへ向かうことに疑念を呈している。極めて微妙な態度である。カミュのようなアルジェリア民族独立運動への距離感の表明は、しばしばフランスの植民地主義的「ウルトラ」に利用され、フランス共産党とアルジェリア民族独立戦線がともに非難するところのものであった。このことにデリダは自覚的である。しかし、カミュのようなフランスのアルジェリア人リベラルの中間的態度を評価するなかで、デリダはナショナリズムへの熱狂とは別の仕方でも反植民地主義、社会主義を前進させる方向を模索していたのだと言える<sup>15</sup>。

カミュの議論は一面で「アルジェリアのフランス人」とムスリム、アラブコミュニティの共生に対してありうべき解決、つまり「すべての者にとって公正な立場」を探ろうとするものであった。しかし、そのような立場設定自体が植民地主義的言説から切り離せないのではないかという疑念はありえる。サイドは「カミュとフランス帝国体験」において、カミュのエクリチュールと、政治的時評を重ねながら、その植民地主義的意識の浸透を厳しく批判している<sup>16</sup>。同化政策の

<sup>13</sup> 「A アラブの要求の中で正当な点 [……] 一、植民地主義、およびその制度上の弊害。二、常に提案されるが決して実現した試みのない、同化という繰り返して口にされる嘘。三、土地割当と所得配分（下層プロレタリアート）の明らかな不公平。[……] 四、心理的苦痛。[……]。B アラブの要求の中で不当な点 立派で自由な生活を再び見出したいという願望、フランスによって保障されたあらゆる政治的解決に対する信頼の全的喪失、それに、年端のゆかぬ、政治にうとい反徒にありがちなロマンティスムも手伝って、若干の闘志とその首脳部は民族独立を要求するに至った。アラブの要求に対してどれほど好意的であるにせよ、アルジェリアに関する限り、民族独立はまったく感情的な常套句に過ぎないということをししかしながら認めるべきである。アルジェリア国家というものはかつて一度も存在した試しが無い。ユダヤ人、トルコ人、ギリシャ人、イタリア人、ベルベル人は、この潜在的国家の管理を要求する同等の権利を有することになる。現在、アラブ人だけがアルジェリアのすべてを形づくっているわけではない。フランス植民の重要性とふるさとはとりわけ歴史において比べるものがないほどの問題を生み出すのに十分である。アルジェリアのフランス人もまた、しかも言葉の最も強い意味で土着民なのだ。純粋にアラブだけのアルジェリアでは経済的独立を達成できないだろう、ということも付け加えておかなければならない。経済的独立がなければ政治的独立など幻にすぎないのだ。フランスの努力が、たとえどれほど不十分であるにせよ、それは、いかなる国も、現時点においては、その肩代わりを承諾することはないほどの大きさに達している」（Albert Camus (1958) « ALGÉRIE 1958 » dans *Actuelles, III, Chronique algériennes 1939-1958*, Gallimard, pp. 200-202 (「アルジェリア一九五八年」鷲見洋一訳『カミュ全集 10 追放と王国・悪霊』佐藤朔・高島正明編、新潮社、1973年、320-321頁、下線部強調引用者)。

<sup>14</sup> Derrida (2012), p. 293.

<sup>15</sup> Ibid., p. 294.

<sup>16</sup> 「カミュの物語は、アルジェリアの地理に対して、かたくなに優先権を主張していた。アルジェリ



肯定から植民地主義者カミュという像を描くことの是非は本稿の射程を超えているが<sup>17</sup>、その上で、本稿はさしあたりポストコロニアルな批判を初期デリダへ接続することを狙っている。サイド的批判、少なくともカミュを代表とする「アルジェリアのフランス人」リベラルに対する

---

アにおけるフランス植民地の拡大について、まがりなりにも知っている者にとって、フランス側のこの種の主張は、一九三八年にアルジェリアではアラブ語を「外国語」あつかいにするとしたショータン首相の宣言と同じくらい荒唐無稽なものである。カミュは、こういう主張に口当たりのよい半透明のオブラートをかぶせ、長く流通するようにした張本人だとしても主張そのものは、カミュに特有のものというわけではない。彼はただ、アルジェリアに関する植民地主義的言論の長い伝統のなかではぐくまれてきた紋切り型の思想を受け継ぎ、無批判に受け入れたまでである。この間の事情は、カミュの読者や批評家たちからは忘れられたか、無視されたかのいずれかである。ほとんどの読者や批評家にとって、カミュの作品を「人間の条件」を語る実存主義的なものとして解釈する方が、ずっとたやすいことなのである」(Edward W. Said (1994) *Culture and Imperialism*, Vintage Books, p. 180 (「カミュとフランス帝国体験」『文化と帝国主義 1』大橋洋一訳、みすず書房、1998年、326-327頁)

「現在、北アフリカの指導的歴史家のひとりアブドゥラ・ライルにとって、フランスの植民地政策は、アルジェリア人国家そのものを破壊すること以外、なにも意図しなかった。アルジェリア国民というものがかつて存在しなかったとカミュが宣言した裏には、フランスの政策による徹底した破壊が、すべてをきれいさっぱり生産してくれるという前提があったはずだ。けれども、再三わたしが述べているように、ポストコロニアル的出来事の数々によって、わたしたちは、これまでよりも長い歴史にかかわる物語、そしてこれまでよりもっと包括的でごまかしのない解釈を要求されることになった」(ibid., p. 183/331-332)

「社会的状況を語るときのカミュの平明な文体と気取らぬ報告口調は、うずくような複雑な矛盾を隠すものであった。この矛盾は、カミュが感じていたフランス領アルジェリアへの忠誠心を、人間の条件に関する寓話に——多くの批評家たちのように——潤色したところで解決できなかった。人間の条件、いまでも、カミュの社会的・文学的名声は、この人間の条件というテーマに依存している。しかし、フランスの領土強奪と政治的統治権を、それがアルジェリアのナショナリズムに対する共感も共通の認識をも阻害する点をみすえて判断し、つぎに拒絶するという、もっと困難で挑戦的な選択肢は存在しないわけではなかった。このことを考えるとカミュがとらわれていた限界は、もう救いようがないほど麻酔的なものにみえてくる。同時代人におけるフランスとアラブにおける脱植民地文学——たとえばジュルメヌ・ティヨン、カテブ・ヤシン、ファノン、ジュネ——を参照してみると、カミュの物語は、力強いが否定的な役割しか演じていない。カミュの物語のなかで、植民地のいとなみの悲劇的で人間的な真摯さは、脱植民地化運動の破壊がそれを転覆する前に、最後の光芒を発することになった。カミュの物語は、わたしたちがまだ完全には理解していないし、またそこから立ち直ってもいない、ある種の荒廃と悲哀を表現しているのである」(ibid., p. 185/335)

<sup>17</sup> Cf. 猪又俊樹 (2006) 「「アルジェリアのフランス人」のモラル——「客」をめぐる」『一橋研究』、第31巻第2号、一橋研究編集委員会、23-36頁。本稿の範囲を超えてしまうが、カミュやファノンを問題にする以上、サルトルやメルロ＝ポンティといった周辺の思想家との関係についても当然問題にするべきだろう。さしあたり指摘しておくべきは反植民地運動にかんするサルトルの立ち位置の一般性である (Cf. 澤田直 (2022) 「サルトルと第三世界 (2)」『立教大学フランス文学』第51巻、43-69頁)。デリダはしばしばサルトルの反植民地主義的主張やユダヤ人問題に対する基本的方向性に同意を示しつつ、その図式の単調さに批判的なコメントをおこなっている。おそらく「アルジェリア人民の側に立って、植民地主義の暴政からアルジェリア人とフランス人とを同時に解放すべく戦う」というサルトルの主張に大筋で同意しつつも、アルジェリアのフランス人デリダは、フランス本土から「アルジェリア人」と「フランス人」を分割するサルトルではなく、カミュの政治的立場への共感を隠すことがないだろう。

政治的立ち位置への批判はある程度、デリダにも当たるものではないだろうか。おそらくこうした懸念を、若きデリダの1952年のレポート「一八八四年から一九一四年までのフランスにおける植民地化の原因と性質、最初期の諸帰結」は強化する。ベアリングが指摘するように、まず同レポート内のデリダは自身を「入植者」側に位置づけているように思われる。デリダは非ヨーロッパのアルジェリア人口を無視し、植民者を支持する「アルジェリア人」ということばを用いつつ、「われらのアフリカ帝国」における学校や大学の整備、アフリカにおける鉄道網の発達をフランスの植民地による「利潤」だと考えていたようである<sup>18</sup>。デリダは、アルジェリアの自律への願いをもっていたものの、それは必ずしもアルジェリアの独立を意味しておらず、あくまでフランスという大国の経済開発とのバランスのなかでアルジェリアが繁栄し、そのなかで植民地主義的差別、不正が是正されることを希望していた<sup>19</sup>。脱植民地化を支持しつつ、民族独立の理念よりも、植民地主義の効用を計量しようとする態度は、後年の自身の学生時代を振り返る発言のなかでも確認できる<sup>20</sup>。アルジェにいたころのデリダは政治的に活発な「左翼」グループに属していたが、ここでいう「左翼」は民族独立運動の「極右」に対する「左」、つまりアルジェリアのリベラルを指すものである。サイドの指摘は、フランス占領以前の人口編成についてあまりに簡略化していると思われるかもしれない。しかし、植民地主義的言説へ譲歩する態度をどうするのかという批判はシンプルに、アルジェで生まれ育った「フランス人デリダ」の揺れ動き（あるいは「なまぬるさ」）を問うものではないだろうか。

いったんまとめよう。まず1950年代から1960年代のデリダの政治的ポジションは、アルジェリアにおける植民地主義的ヒエラルキーの是正を求める脱植民地運動にコミットしつつも、民族独立ではなくあくまで自律を求めるアルジェリアのフランス人リベラルと親和性の高いものであった。この立場はフランスにおいて植民地主義を支持する右派とは異なるが、アルジェリア民族独立戦線やフランス共産党によるアルジェリア民族独立革命を純粹に支持する立場でもない。若きデリダの残したテキストに植民地主義政策の効用を一定程度評価し、独立を支持しないことで、植民地主義を正当化する立場へと吸収される傾向があったことは否定できず、独立以後、ポストコロニアルな視点からの強烈的な批判を受けうるものであろう。こうした政治的背景は、超越論的

<sup>18</sup> デリダはノラへの書簡においてティヨンに対する経済主義という批判に対して、むしろマルクス主義的な経済帝国主義、「植民地システム」における「利潤 profit」の概念が不十分であり、より複雑な分析を有するべきではないかと指摘している (Derrida 2012, p. 290)。

<sup>19</sup> Cf. Baring (2010), p. 248.

<sup>20</sup> 「アルジェリアの問題は少し遠いものとなり、複雑化しました。物事は私の中でも他の場所においても解決していないとは確かに感じていました。望郷の思いと同時に恐ろしい場所から逃れたという感情がありました。それは、放棄したという、わずかながら後ろめたい気持ちを伴ったものでした。アルジェの準備学級文科一年次クラスにいた時には、私はアルジェのいくつかの「左翼」グループにぞくするようになっていました。[……] アルジェリアの独立に賛成してはいませんが、われわれはフランスの厳しい政治には反対していました。変革を通じてわれわれは、アルジェリア人に割り当てられた地位の脱植民地化のために闘っていました。要するにパリに着いた時には、こうしたことのすべては現実的には少し遠ざかったものとなっていたのです。しかし、私にはアルジェリアを去ったという良心のやましさがありました」(ジャック・デリダ、アイサ・ケラティ 1999, 112-113頁)。

ヨーロッパとその外部、脱植民地主義運動との共属関係を強調するデリダの理論的立論にも浸透しているように思われる。

### 「理性」への共属から、「自民族中心主義」と「原暴力」へのシフト

先に述べたように、「コギトと『狂気の歴史』」初出においてファノンへの参照が興味深いのは、初期デリダの理論枠組みにみられる「超越論的ヨーロッパ」の不可避性という論点が、アルジェリアの文脈に紐づけられるからである。この超越論的ヨーロッパ、西洋的理性との関係の不可避性という論点は、「幾何学の起源」「序説」のフッサール解釈以後、「コギトと『狂気の歴史』」だけでなく、「暴力と形而上学」におけるギリシャ的思考とユダヤ的外部、アントナン・アルトー、レヴィ=ストロース論における西洋と脱植民地主義という論点として反復される。

デリダの立場を際立たせるために比較しておくべきは 1960 年代初頭のフランス思想の「告発の調子」との差異である<sup>21</sup>。加國は 1961 年に出版された『狂気の歴史』、『全体性と無限』、『地に呪われた者』が「西洋（とりわけ西洋近代の思想）を、西洋にとっての「他者」の観点から、その排他性、暴力性にかんして告発する」ものだとまとめている。フーコーにおける「狂人」、レヴィナスにおける「ユダヤ人」、ファノンにおける「アフリカ」、「アラブ」、「被植民地現地人」がまさしく西洋の「他者」なのである。こうしたなかで、後続世代のデリダの位置は少々奇妙である。デリダが記述するのは繰り返すが革命的外部による告発という以上に、まず理性とその外部の共属関係という論点（「序説」、「コギトと『狂気の歴史』」）である。本稿は、こうした 1960 年代に書かれたテキストのなかで反復される構図が、もっぱらフランスとアルジェリアの関係においてリベラルな改良主義的理想を表現しているとみている。

たとえば 1964 年のレヴィナス論「暴力と形而上学」では、「ギリシャ的発語の歴史と渡り合わんとする強固な意志」によって、ヨーロッパの理性の祖たるギリシャ的な同の思考を相対化するヘブライ的な他の運動が検討される。このとき、ヘブライズムとヘレニズムという二つの起源はある意味で、互いに乗り越え合うものであり、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』から「ユダヤギリシャ人はギリシャユダヤ人である。両極端は出会う」というセンテンスによって象徴的に接合されている。また「植民地化の問題」(Derrida 1967, p. 283/384) が間接的な仕方であつかわれるのは 1965 年冬に『テルケル』誌に発表されたアントナン・アルトー論である。アルトーは古典的な西洋演劇の外へ脱出するために、バリ島、メキシコ、ヒンドゥー、イラン、エジプト等々の「ヨーロッパの外」(ibid., p. 390/286) を参照することで、西洋形而上学とは異なる「植民地状態から脱出した演劇」(ibid., p. 285/388) を目指す範例である。このとき、西洋文明を破壊しようとしたアルトーの行為は、同時に「容赦ない戦いの傷跡」を刻まれ、「最も批判的となる瞬間に、西洋形而上学を成就」してしまう境界的試みだと評価される (ibid., p. 291/396)。1965 年以降には明確に西洋の「自民族中心主義」の主題があつかわれるようになる。とりわけレヴィ=ストロース

<sup>21</sup> 加國尚志 (2005) 「アルジェリア戦争以降の思想——ファノン、サルトル、フーコー、サイード」『立命館大学人文科学研究紀要』第 85 号、立命館大学人文科学研究所、81-96 頁。

論において、デリダはレヴィ=ストロースが自民族中心主義を告発する態度を高く評価しながら、即座に西洋から現地を分離して理想化する傾向のある修辞を抜き出し、これを批判する。自民族中心主義批判を激化させながらも、西洋的暴力を引き受けざるをえないことへの「批判的責任」が問われることになる<sup>22</sup>。植民地主義の告発の流れのなかで、デリダの告発は植民地主義に対する批判から即座に植民地主義批判に対する批判へと折り返す。外からなされるのではなく、あくまで西洋のなかでしかない場所に執拗にとどまるデリダの態度には、「アルジェリアのフランス人」という立場設定が背景としてみえるのである<sup>23</sup>。

アルジェリア戦争はアルジェリアのひとびとを「フランス人」と「アルジェリア人」に分割した。1960年代初頭、アルジェリアの独立に賛成してはいなかった「アルジェリアのフランス人」デリダはフランスからも独立運動からも遠ざかることとなる。その上で、「アルジェリアの」「フランス人」としてフランスとアルジェリアの外にいるしかなかったという事実は、被植民地への同一化や理想化を自らに厳しく禁止した上で、(おそらく植民地主義的、自民族中心主義的ロゴスの)暴力の担い手でしかないのだというデリダの理論的自覚をも特徴づけているように思われる。デリダは西洋の著名なテキストしか脱構築しないことで逆説的に西洋のロゴス中心主義を強化するというサイド的な批判が頭に浮かぶかもしれない。しかし、自身を西洋の外部に浸すのではなく、むしろ切り離しながら西洋に内属することで、西洋のロゴスへの脱構築的な戦略は先鋭化したのであり、脱構築的戦略の精度と限界をみるためには、まずこの内属の意味を見極めなければならぬだろう。

---

<sup>22</sup> 「民族学は——あらゆる科学と同様に——言説というエレメントのなかで生み出される。そして、民族学はまず最初はヨーロッパの科学であり、やむをえずとはいえ伝統に属する諸概念を使用する。したがって、民族学者の意図に関係なく、またこのことは民族学者の決断にも依存しないのだが、彼がまさに民族中心主義を告発する瞬間に、彼は自分の言説の中で、民族中心主義の諸前提を受け入れてしまうのである。かかる必然性を避けることはできない。[……] しかし、たとえ誰もそこから逃れられないのだとしても、それゆえ、たとえどんなにわずかであれこの必然性に屈することに関しては誰も責任がないのだとしても、だからといってこの必然性に屈する仕方がすべて同等の正当性を有しているということにはならない。言説の質と豊かさはおそらく、形而上学の歴史と相続された諸概念とに対する関係が思考される際の、批判的な厳密性によって計られる。ここでいう関係とは、人間科学の言語に対する批判的関係であり、言説の批判的責任である。ある遺産の脱-構築のために必要な資源を、その遺産それ自体から借り受ける言説に関して、その資格問題を明確に体系的に提起しなければならないのだ。」(Derrida 1967, p. 414/572-573)

<sup>23</sup> 前出したファノンも『アルジェリア革命の五年』第五章の「アルジェリアにおけるヨーロッパ人少数派」において「アルジェリアのユダヤ人」という節を設けているが、ここで描かれるユダヤ人は植民地支配に結びつけられるフランスからの優遇を受ける官吏や商人、アラブ化したユダヤ人大衆、民族解放闘争へ積極的に参加しているユダヤ系アルジェリア人という類型である。そうした区分におそらくデリダは属しきれていない。デリダはそうした「属しきれなさ」から議論を立てることもおそらく可能だっただろう。しかし、ここで関心を引くのは、やはりデリダがそうした仕方ではなく、あくまでフランス/アルジェリアという植民地主義/脱植民地主義という対比的構図、つまり「アルジェリアのフランス人」がもつパラドクスを関心の中心におきながら、ありうべき立場を探ろうとしていたということだと思われる。

その上で、1960年代初頭に提示された「超越論的ヨーロッパ」、すなわち、ありうべき権利上の西洋的価値への所属の不可避性という問題は、上記のギリシャ的の思考、植民地主義、自民族中心主義といった主題を通過していきながら、議論の焦点を移していくことへも目を向けるべきだろう。超越論的ヨーロッパの不可避性という論点は、理性との共属という以上に、ロゴスの暴力の不可避性に、つまり、フランス人でしかなかったという状況を引き受けさせられる「暴力的」事実性の認識として捉えられるのではないだろうか。議論の強調点の変化は、倫理的選択、倫理的非暴力に絶対的に先行する起源的で超越論的な暴力の引き受けという初期デリダの論点の練り上げへつながっているのではないか<sup>24</sup>。

後年にいたるまでデリダの政治的主張はおそらく一貫しているのだが、アルジェリア独立をめぐっておそらく反省がなされたと思われる部分がある。まず、少なくとも後年のデリダはアルジェリアのフランス人リベラルの動きを認めつつ、その無力についても自覚的である。そして、植民地主義的共属という観点以上に、まず独立運動における対抗暴力を認めるべきだと考えていた。そして、植民地支配の暴力に対して対抗暴力は行使しうるのであり、「アルジェリアのフランス人」の多数が国を追われるとしても、まずもって独立の大義を認めるべきであると直接的に語りもするだろう<sup>25</sup>。この植民地主義の暴力と民族独立の対抗暴力の次元の自覚が、1950年代から1962年

<sup>24</sup> 「われわれは絶対的に平和などと言わない[Nous ne disons pas absolument pacifique]。われわれはエコノミックなどと言う。超越論的で前-倫理的な暴力、非対称性（一般）が存在しているのであり、この非対称性の根元（archie）は同であって、しかるのちに、逆の非対称性、レヴィナスが語っている倫理的非暴力が可能になるのである」（Derrida 1967, p. 188/250）

<sup>25</sup> 「暴力と反対暴力については、どれほど問題が難しいかお分かりでしょう。当時も今も、わたしはこう考えています。植民地に対する暴力は単に土地の収用という物理的な暴力ではなく、文化的・言語的・イデオロギ的・象徴的暴力だったのであり、それは許し難い、と。そして、その犠牲になった人々には、もうひとつの暴力によってそこから逃れそれに応酬する以外に手段がなかったのだ、と。一般的に言えば、当然、暴力は許容しがたい。しかし、非暴力へのあらゆる訴えが底をついたとき、残るのは悲劇的解決だけです。こう主張するのは、解決は悲劇的であっても、それが——はっきり言う必要があります——テロリズムという名の反対暴力だといって批判することは難しいからです。アルジェリアでも別のところでも、テロリズムは最初に加えられた暴力を後退させるための唯一の有効な手段として現れたのです。これはモラルの上では是認できないとはいえ、かといって、暴力回避を義務として自己に課すべきだと言うのがモラルに適うとも思いません。それは暴力を蒙らない者の視点からしか言えないことです。したがって、アルジェリアの悲劇がどんなものだったにせよ——これをわたしは個人的に、同時にいくつもの場面から体験しました。アルジェリア解放運動を支持しながらも、双方が行使する暴力にはぞっとしました——わたしはテロリズムだけを弾劾するのは難しいと考えます。フランスのテロ、軍事テロ、国家テロがあり、暴行や拷問があった以上、解放運動のテロリズム暴力を弾劾することはできないと考えます」（ジャック・デリダ（1987）「自伝的な“言葉”——pourquoi pas (why not) Sartre」生方淳子・港道隆訳、『現代思想』第15巻第8号、73-74頁）

「アルジェリア戦争の勃発、つまり一九五四年の最初の蜂起の前に、長い年月にわたってアルジェリア人の側とフランス人リベラリストの側から、暴力に訴えずに状況を変えようとする数多くの努力があったことは周知の事実です。しかし、それらの努力はみな、アルジェリアで権力を握っていた連中に無視され、あなどられ、ないがしろにされてしまいました。したがってわたしは、アルジェリアに生きた者の悲しみの中でこう言わなければなりません——わたしは長い間、アルジェリア戦争のさな

のアルジェリア独立を境として<sup>26</sup>1990年代にいたる議論の変化となるだろう<sup>27</sup>。

まとめよう。「フランスの子ども」であることを引き受けざるをえなかった「アルジェリアのフランス人」デリダにとって、アルジェリア戦争、そして独立は、フランスにおける左派、アルジェリアにおける民族独立運動のいずれにも同一化不可能な、それ自体、根こぎの経験であった。自身が植民地主義的空間において同一化しえた「コロニ」への再同一化は戦後、ポストコロニアルな批判のなかで禁じられており、その不可能性はデリダに反対暴力そのものの不可避免的な消極的肯定と、保守／革新の二者択一が提示不可能な、理念的解決を希求させたように思われる。1963年のテキストにおいて書き込まれたフランス占領下のアルジェリアにおける反植民地主義的暴力とヨーロッパ的理性の相即という主題は、アルジェリアのフランス人デリダがフランス国家と独立運動のあいだで揺れ動いた経験と無縁ではなく、アルジェリアの民族独立ナショナリズムに対するアンビバレントな態度はデリダの思索に絶えずつきまとうだろう。デリダの理論的枠組み、脱構築的所作は、容易に保守親和的になりうるし、実際のデリダの政治的立場も同期している。このことは指摘してしすぎることはない。後年、デリダはフランス、ユダヤ、アラブからの三重の隔たりを語ることになるが、1950-60年代においてデリダはむしろ絶えず自分が「フランス」から切り離されていながらも「フランス人」でしかないことを自覚しているように思われる。そし

---

かでも、独立に向けてアルジェリア人が展開している戦いを是認しつつもなお、アルジェリアのフランス人の大半に残留を許すような独創的な政治的解決を希望していました。けれども到来したのはそのような解決ではなく、アルジェリアのフランス人は何がどうあれ国外退去せざるを得ず、つまり言われるように本国（メトロポール）に帰らざるを得ませんでした。これは、もちろん苦痛と悲しみをもって体験した事実です。しかしそれでも選択できるなら、選択の余地があるなら、わたしはこう言わねばなりません——独立の大義こそ正義に適ったものであり、不可避だったのだ、と」（同上、74頁）  
<sup>26</sup> Jean Luc Nancy は、デリダにとって 1962 年というアルジェリア独立の日付を、「幾何学の起源」「序説」というデリダのはじめての出版物とともに、ひとつの変節点とみている。彼は 1967 年に「コギトと『狂気の歴史』」へ加筆された「裂開」という表現に注目している（Jean-Luc Nancy (2019) « L'indépendance de l'Algérie et l'indépendance de Derrida » dans *Derrida, suppléments avec un texte d'Alexander García Düttmann*, Galilée, pp. 145-150)。「いつものように軋轢は内的である。外は内（であり）、内で傷つけられ、ヘーゲルの分裂（Entzweiung）の裂開 [la déhiscence] にしたがって内を分割する」（Derrida 1967, p. 62/77）

<sup>27</sup> ベアリングは最終的に、「アルジェリアのフランス人」から「フランコマグレブ」への移行とともに政治的沈黙を破る 1990 年代以降のデリダを「サバルタン状況」として読解することに慣れてしまっているとしても、そこには「アルジェリアのフランス人リベラル」の植民者／被植民者のジレンマが反復されているのだと指摘する（Baring 2020, p. 259）。デリダの言説自体は一貫しており、1950-60年代に極右に早急に同化される傾向さえあったアルジェリアのフランス人リベラルのポジションはマルクス主義の退潮とともに、1990年代にはごく自然な仕方、ラディカル左派、ポストコロニアルな思想家の立場として理解されるようになっていく。ベアリングは、政治的対立を拒否し、時代状況のなかでさまざまな解釈に晒されてきたデリダの思想をさしあたり代補やパルマコンといった脱構築的理論と並べながら、必ずしも政治的でないわけではないだろう、と主張する（ibid., p. 260）。ベアリングによる理論接続の仕方はいささか控えめではあるが、デリダの思索に「サバルタン」よりもむしろ「アルジェリアのフランス人」性をこそみてとろうとする姿勢には同意できる。

て、フランス人デリダの政治的態度が、まずフランスという国家内解決を優先させたという事実、その鉤括弧付きの「保守性」は指摘しておくべきであろう。植民地主義的国家としてのフランスと、アルジェリアの民族主義的独立運動のいずれかという選択肢が与えられたとき、少なくともデリダは前者にシンパシーを感じたのである。

その上で、独立運動に直接身を投じたファノン、またフランス本土において独立運動の理想を支持しえたサルトルとも異なる、カミュ的な「アルジェリアのフランス人」としての「なまぬるさ」をどう評価するか。本稿では、アルジェに生まれながら「フランス人」であることから逃れられない状況、原暴力を引き受けざるをえない事実性を強調することで、民族主義的ナショナリズムから距離をとりながら国民国家の力を自覚しつつ、自民族中心主義批判を練り上げていったプロセスをみてとった。こうしたデリダのポジショナリティ、またそれと類比的な理論装置は、一定程度、現地と関係を持ちながらもネイティヴインフォーマントから自らを切り離し、「移民」的な流動的視点から、国際的力関係を問い直そうとする後年の倫理・政治的態度を準備するだろう<sup>28</sup>。

「ごく間近にして限りなく遠いということ——それこそが、こう言ってよければ、われわれがその経験をたたき込まれた隔たりであった。それは忘れがたく、一般化可能なものである」。デリダはアルジェリアにおける自身の経験をこのように評している<sup>29</sup>。アルジェリアを語ることからの遠さ、遠くからの対抗暴力の肯定、そして、ありうべき理想的解決の希求。デリダの出自と彼が辿った歴史的経緯は、デリダの政治性と暴力への態度を確かに規定しているように思われる。端的に言えば、条件としての暴力という論点は、「アルジェリア」ネイティヴインフォーマントへの同一化の可能性と不可能性と不可分であり、その遠ざかりの中で思考されるべきものであるように思われる。今日、デリダのテキストを読解しつつ、「脱構築」という所作をひとが引き継ぐとして、デリダが有した遠ざかりの罪責感にただ乗りし、外から曖昧な連帯を示すだけだとすれば、そのような「なまぬるさ」に意味はあるだろうか。しかし、そのような遠ざかりのなかでしか、つまるところ接近することができないこと、その接触ならざる接触に賭けることがさしあたりデリダにかろうじて可能であったのだとすれば、われわれはどのような仕方で彼のテキストに近づくことができるのだろうか<sup>30</sup>。

<sup>28</sup> 実際、アルジェリア内戦に際して作成された「アルジェリアの市民的な平和のためのアピール」を踏まえて1994年にデリダが発表したコメントはそれがいかに自分自身のうちの「アルジェリア的なもの」を背景としていたとしても、それはかつて「アルジェリア人」でありえた自分などではなく、あくまで「アルジェリアで生まれたフランス籍の市民」として外から発せられている。「孤立した国家」における内在不干渉、民族自決ではなく、あくまで国民国家を超える新たな国際的連帯のなかで政治的責任が問われうるし、問わねばならないとされる (Cf. Jacques Derrida (2001) *Papier Machine*, Galilée, p. 223)。

<sup>29</sup> Jacques Derrida (1996) *Le monolinguisme de l'autre*, Galilée, p. 66 (『たった一つの、私のものではない言葉——他者の単一言語使用』守中高明訳、岩波書店、2001年、72頁)。

<sup>30</sup> こうしたデリダの自伝的経験のある種の当事者性をめぐる立論として考え直すことができるだろうか。宮前良平は、ある興味深い学生の卒業論文を引きながら、東日本大震災の被災者のなかで、同



---

じく「被災した」「当事者」であるにもかかわらず、その被害の濃度が当事者共同体の内部で測られることで、(そして、おそらく自身の経験を「なまぬるく」感じてしまうことで) むしろ当事者であることから遠ざかろうとする「半分被災者」というアイデンティティへ言及している。当事者であることからの遠ざかりは同様の出来事に触れた人々のなかでも語りうることの濃淡をもたらすのである。

「「半分被災者」と「被災者」のあいだでは、家族の話は決して語られないのだと、彼女[宮前氏の論文を参照し卒業論文を書いたとされる学生]は指摘します。なぜなら、家族を亡くした人の痛みは、それを経験していない者には決してわからないし、生半可にわかろうとしてはいけないことが暗黙の了解となっているからです。被災者にとっては触れてほしくない、半分被災者にとっては触れてはならない話題であるため、お互いに沈黙しあっている。しかし、そうしたことを知らない全くの部外者である非被災者(論文には東京の大学で出会った同世代の学生が出てきます)は不用意に、「ご家族は？」と聞いてしまう。彼女はそのたびに、自分の友人のように家族を亡くした人が同じ質問を受けたらどう思うだろうかと想像します」(宮前良平「空白と傷; 役者解題のためのノート」、カイ・T・エリクソン(2021)『そこにすべてがあった バッファロー・クリーク洪水と集合的トラウマ』宮前良平・大門大朗・高原耕平訳、夕書房、325頁)。おそらくデリダにとって脱構築は当事者であることからの退きから生まれる、隔たりにおける交渉の契機なのではないだろうか。宮地尚子はトラウマからの回復をめぐって、当事者や支援者の動きうるサバイバーマップを内海-尾根-外海によって構成される環状島のトポグラフィとして描いた。内海中央がトラウマのゼロ地点であり、そこにサバルタンの当事者性が位置付けられる(宮地尚子(2018)『環状島=トラウマの地政学』みすず書房、9頁)。脱構築はこのゼロ地点と外海のあいだを揺れ動いている。